
透明な階段

葉崎あすか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

透明な階段

【Nコード】

N6527C

【作者名】

葉崎あすか

【あらすじ】

ファンタジーとは少し違うミステリー要素も入った話になっていると思います。詳しくは本編を。

1:01 What is chirida? 〓チリカって何?〓

1

「まったく、カーニヤも人使いが荒いよ……」

ライは今夜、魔法術に使う、うさぎを捕まえるため、トラップ

(罠) を仕掛けていた。

「えさをここに置いて、そして、縄をこうして……」ぶつぶつと、ひとりごとを言いながら、作業を続けていく。

だが、なかなか作業は終わらなかった。なぜならライは、とても不器用だったからだ。

「……………」だんだん無口になっていくライ。

思い通りに上手くいかないのに、腹が立ってきていた。おまけに、真夏の暑さが腹立たしさを増幅させた。サンサンと照りつける太陽をにらみつけ、ライは、黙々と作業を続けた。

数時間後。

「よし、完成！」ライは、汗だくになりながらも、完成したばかりのトラップらしき物を、満足げに見つめた。

「あとは、うさぎが、かかるのを待つだけ！」

だが、残念な事にライが大声で叫んでしまったため、うさぎは危険を察知し、逃げていってしまった。その事を知らないライは、トラップらしき物の近くの茂みに隠れ、うさぎがトラップに捕まるのを待っていた。

日はトツプリと暮れ、夜空に星が瞬き始めた頃。

ライはまだ、茂みに隠れていた。

「……………」おかしいな」そのとき、ライの頭に激痛が走った。あれが始まる直前だと、ライは思った。

『ライ！そんな馬鹿な事やってないで、早く帰ってきな！珍しく客が来た』

ライが魔法使いになるために弟子入りしているカーニャからだつた。

そのカーニャの声が聞こえてくるのは、近くにカーニャがいる訳でもなく、電話をしている訳でもない。カーニャは、ライに魔法で頭の中に話しかけていたのだ。

『うう、頭が痛くなるから、やめてくれよ』ズキズキする頭を押さえながらライは魔法を使つて返事をした。

『なに、ばかなこと言っているんだい！それはお前の魔法を受け止める力が、弱いからだろう！』

『わ、分かったから、そんなにおっきな声を出さないでくれよ』

『いいかい、早く帰ってくるんだよ！』プツンと切れた音がライの頭に中に響いた。

カーニャからの魔法が解けた音だった。とたんに、ライの頭痛が治まった。

「本当に人使いが荒いよな……………」

苦勞して仕上げたトラップらしきものを片付けながら、ライはそう呟くのだった。

2

マクニ（魔法使用許可区域）のはずれの森のおくに、ライとカーニヤが住んでいた。

マクニの平地から、カーニヤの家に行くまでは、約二時間は歩く、ふつうの山道ならまだしも、道とは言えない道を、二時間も歩く。このことを、知っているのか知らないのか、カーニヤは約百四十七年前から、魔法を使った商売を始めた。

当然、客など、めったに來ない。

もし、ここマクニが、魔法がないところだったならば、多少は客が来るのかもしれないが、残念な事に、マクニに住んでいる人たちは、魔法が使える。カーニヤに勝るものはいないが、通常、少しは使えれば生活には苦勞しない。よほどの事情がない限り。

「……………」

家の近くに來たライは、その場に固まった。

なぜなら、家の前で、三つ編みにしたライと同じくらいの年の（ちなみに、ライは、現在十三歳である）少女が、立っていたからだった。

「あの……、もしかしてカーニヤのお客？」ライは、その少女に近づいて、聞いてみた。

そしてライは、その少女を見て、少し首をかしげた。山道を歩いてきたのなら、全身泥まみれになるのは、さけられないことだったが、この少女は、少しも汚れていなかったのだ。

「は、はいっ」突然、あわれたライに声をかけられ、返事をする少女。鈴を転がしたような声だった。

「なんで、家に入らないの？」

「あ、あの、カーニヤさんにここで待っている。と言われたもの

で「少女は、服のはしを、強くにぎり、うつむき加減で言った。

少女は、麻のストンとした服に、七分丈のズボンをはいていた。マクニの子の典型的なファッションだ。ライの服も似たようなもので、上の服の丈が少し長い程度で、あまり変わりはない。

「……………」ライはあきれた。久しぶりに来たお客なのに、何で中に入れないんだ……。 「カーニャ！」ライは、木製のドアをバンツと開けながら、カーニャに向かって叫んだ。

「なんだい。うるさいね」

カーニャは、直径一メートルはありそうな、大きなつぼを火にかけて、中身を木製の棒でかき回していた。そして、ゆつくりと振り向いた。だが、その手は、ツボをかき回すのをやめない。

「どうして、客を中に入れてやらないんだ！十年ぶりじゃないか」「正確には、十一年ぶりだがね」カーニャは、片ほほで笑うと言った。

「今、薬草を煮詰めているんだ。なかなか取れない貴重な薬草だ。客なんかに、邪魔されたくないね」そういうと、カーニャは再び、ゆつくりと顔をツボのほうへ戻した。そして、ぽつりと言った。

「それに、あの子は客じゃない」カーニャにしては、めずらしい小声だった。

「……………」客じゃない？どうしてさ」

「あの子は、厄介なことを連れてくる疫病神だ。かわらないほうがいい」

「……………」それじゃあ、なんで、『客がきたから早く来い！』なんていったのさ」

「そのときは、気づかなかったからだ」

「……………」

3

「最近、奇妙な夢を見るんです」

「……ふむ」

「毎日、見るんです」

「……ほう」

カーニャは、少女　ロゼという名前らしい　話を聞いていた。なぜ、カーニャは『疫病神』とまで言ったロゼの話を聞いているのか。
原因はライとカーニャにあった。

ライは、カーニャの家に入るとき、戸を閉め忘れてしまったのだ。ロゼは、およそ二時間近くも、カーニャに家の前で待たされていたので足が棒のようになっており、早く中に入りたかった。という、二つの（カーニャにとっては）大変不幸な条件が、重なってしまったため、ロゼが、カーニャの家に勝手に入り込んで、すでに座っているという状況が生まれたのだ。幸いにも、カーニャの言っていた『疫病神』の話は小声で話していたので、ロゼには聞こえなかったようである。

「それじゃ、その怖い夢を見ない薬草をやろう……」カーニャは、一通りロゼの話を聞くと、薬草が保管されている、となりの部屋へフラフラと歩いていった。よほど、ロゼがお気に召さないようである。

ライも、カーニャのとなりで、ロゼの話を聞いていたが、薬草で解決しそうな内容の話であったため、なぜカーニャがそのような状態になるのか、まったく分からなかった。

「どうしたんでしょう」ロゼが、突然ライに向かって言った。

「なにが？」

「カーニャさんです……。あんなにフラフラされていて、ご病氣

ですか？」そのセリフを聞いて、ライは吹き出した。

「……………」？」大笑いをするライを、ロゼは、首をかしげながら見ていた。

「ほら、これでよいじゃろう……………」カーニャは、となりの部屋から戻ってくると、ライが、一度見たことのある薬草を持つてきた。ちなみに、ライが薬草を見たとき、薬草の名前、その効果などを、カーニャは説明した。だがライは、何一つとして覚えていない。

「あ、これは『アウラソウ』ですね。タシユさんに以前もらったことがあります。でも、効きませんでしたけど……………」ロゼは困ったように言った。

そのとなりに居たライは、やっとこさ薬草の名を思い出していた。

「ああ、そうそう。『アウラソウ』ね。はいはい」

カーニャは、ライに鋭い視線を浴びせてから、こう、つぶやいた。

「タシユの奴なんかと一緒にせんでくれ……………」。「アウラソウ」はそうじゃが、カーニャ特製スペシャルスパイス配合じゃから、威力は、すごくなっておる……………」

「あ、そうですか。ありがとうございます」

ロゼは、丁寧に頭を下げると、家から出て行こうとした。

「困ったことがあったら、またいつでも、来ていいですから」ライは手を振りながら言った。

「お前も行け」カーニャがぼそりと言う。

「へ？」ライは耳を疑った。

「薬草で、悪夢が見られなくなるのは、一時的なものじゃ。その、根本的な部分を解決せんと、いかん」

「カーニャが、行けばいいじゃないか」

「お前が行け」

「……………」ライは、また思った。

カーニャは、本当に人使いが荒い、と。

4

「本当に、申し訳ないです」先ほどからロゼは、大変申し訳ないことをしたと思っていた。

カーニヤから、悪夢を見られなくする薬草を、もらっただけではなく、カーニヤの弟子のライが、悪夢の根本的な原因を、解決してくれるというのだ。

なんて親切な人たちなのだろう。ロゼは泣きたいくらい嬉しかった。

「とりあえず、シャルントじいさんのところに行ってみるか。あのじいさんは、もの知りだから、なにか教えてもらえるかもしれない」

「は、はい」ロゼは突然話しかけられて、少し驚いた。ライは、先ほどから黙って、ロゼの前を歩いていたらだった。

ロゼは歩くことが苦手だった。

地面の上に立った二本の足で自分の体重を支えることが、どうしても信じられなかった。といっても、ロゼの足が自分の体重を支えられないほどのものではない。物理的に、無理だと感じていたからだった。

だから、魔法を使って、一センチほど宙に浮いて、進む。ロゼ以外の人は、そのような事をしないで、ふつうに歩く。よって、足を動かさないで進むロゼは、マクニの街なかでは、大変に目立った。それがいやだったロゼは、足を動かすことにした。少し宙に浮きながら。

ロゼは、今までに、自分が歩いている姿を他人に見られても、気づかれたことがなかった。

「ああ、なるほどね」ライが、突然つぶやいた。

「はい？」

思わず返事をしてしまったが、自分に話しかけてきたのだろうか

と、ロゼは少し不安になった。

「うん、なんでもないよ、……そうかそうか」ライは、ロゼを少し振り向いて、笑った。

ロゼは、そんなライを見て、ゾクツとした。

振り向いたライの視線が、ロゼの足元へ、一瞬だが、そそがれたような気がしたからだ。同時に、ロゼの頭にチクツとした軽い痛みが走った。

思考を読まれた。ロゼはその一瞬にして理解した。

さすが、マクニが誇る大魔法使いカーニャの弟子だ。

おそらく、ライは、ロゼの足を見て、宙に浮いていることを確認し、そして、思考を読み、確信を持った。

ロゼは、つばをゴクリと飲んだ。

そして、魔法を解いて、自分の足で歩いてみようかと考えた。

「ああ、なるほどね」全てを理解したとき、ライの疑問は見事に解消された。

ライが、ロゼに最初にあつたときの疑問。カーニヤの家に来るときは、泥まみれになるはずなのに、ロゼはそうではなかったこと。

ロゼが、宙に浮いていたからだつた。

おそらく、カーニヤが、ロゼを気に入らなかったのも、きっとそのせいだろう。ライは、そう考えていた。

振り向いた瞬間に、足と思考をライは見た。

微かだが、足が浮いていたし、そうする理由も分かつた。

分かつたと同時に、ライは、背中に氷を入れたような感覚があつた。

また、ライも同じだったからだつた。

ロゼと理由は異なるが、ライの足もまた、一ミリほど浮いていた。ライは、生まれたときから、手足が思うように動かなかつた。

手は、生活には不自由しないものの、うさぎのトラップを作るなど、細かい作業を行うには、不可能に近かつた。また、足は、手よりもひどく、歩くと足全体に、チリチリとした痛みが走つた。

心配したライの両親は、マクニの魔法使いカーニヤに、ライを預け、自分の魔法力を高めて、自分の病気を治すようにと考えた。

負けず嫌いのライの性格と、カーニヤが与える試練（ライに言わせれば『人使いが荒い』となるが）によって、ライの手足は徐々に回復し、手は、ウサギのトラップが時間がかかるが作れるほどに、足は、魔法で浮かせれば痛みがなくなり、走れるまでになった。ちなみに、ロゼが一センチ、ライが一ミリ。この九ミリ差は、魔法力の差とも言えよう。

「さあ、着いた」

歩き始めて、およそ六時間。ライとロゼは、一度も休むことなく、マクニから程遠い、リン（緑育成区域）に着いた。

ライとロゼが尋ねる、シャルントが住むところである。

先ほど、カツコ付けで説明したが、マクニとは、魔法使用許可区域のことである。だが、使用許可と言っているが、マクニから離れて、リンやクウクなどのほかの区域に言った場合でも、魔法は使え、規則を破るなどということはない。ただ、リンなどの、ほかの区域から生まれた人は、魔法が使えないだけである。

リンの住民は、魔法の代わりに、特別な力が備わっているのだが……。それはのちのち、明らかになるだろう。

「遅かったのう」

ライは、木製のドアを叩こうとした。が、シャルントに先を越された。目の前のドアが開いたのである。ライは、ドアの端にスツとよけた。すると、シャルントが、ゆっくりとした歩きで出てきた。

シャルント　タノル・シャルントは、リンの森の番人である。

と言っても、リン全体が森なので、区長の役割もしている人物である。

小柄に白いひげ、いつもかぶっている、真っ赤な三角帽は、『白雪姫』の七人の小人を連想させる。

「いつもながら、絶好調ですね。『先読み』は」ライが、二カツと笑いながら言った。

「『先読み』……」ロゼは、リンの土地を始めてふんだが、『先読み』のことは知っていた。

リンは全体が森なので、天気に影響されやすい。　台風が来れば木々は倒れ、雨が降らねば木々は枯れる　そのことを事前に知るために、先を読む力　『先読み』が、リンの住人に備わったという説がある。

魔法でも、先を読むことはできるが、『先読み』は、それをはる

かに上回る力があつた。

「お主たちの、言いたいことは良くわかつとるが、今は、そんなことに付き合つてられんのじゃ。あと一ヵ月後に、大きなあらしがくるでの。その対策を立てなくてはならん」

「ああ、そうですね……。それじゃあ、失礼します」

ライは、軽く頭を下げると、その場から立ち去ろうとした。

「待て、役に立つかどうか分かんが、こやつを連れて行け」

出てきたのは、十歳くらいの男の子。短髪に鋭い目。耳には、緑色に光るイヤリングをしていた。

「わしの孫じゃ。五年なら貸してやつてもええ」シャルントはそういうと、急ぎ足で森の奥へと去っていった。

「……五年？」五年とはどういうことなのだろう。ロゼは少し不安になった。

「君、名前は？」ライが、微笑みながら聞く。いつも笑っている人だなとロゼは思った。

「……シャルゴ」ロゼは想像していたよりも、高い声だったのでびっくりした。

「僕はライ。こっちはロゼ。よろしくね」

「……うん」

シャルゴは、コクリと音がしそうな動きでうなずいた。

「すごいですよね、リンの人たちは。うらやましいですよ。未来が見えるなんて」

ロゼは、クウク（飛行研究区域）に行く、道を歩きながら、何度もそう言っていた。

「うん、でも、そうでもないらしいね。さっき、シャルントじいさんも言っていたけど、『先読み』は、最大五年までらしいからね」

「ああ、そうなんですか」

ロゼは、先ほどのシャルントの最後の言葉が、ずっと引っかつ

ていた。自分の悪夢の根源を見つけるまでに五年もかかるのかと、心配になったが、シャルントの言葉は、孫を心配してのことだったのだ。自分が見える五年間は、孫に何にも危険が及ばないから、役に立つから連れて行けということだったのだ。

「あと、五年以内だったら、自分の死も見えるようだからね。先が見えるというのは、あんまり良いことじゃない」ライは、微かに顔を暗くしながら言った。

「ああ……」

ロゼは、深く息を吸った。

リンの人が、課される運命。自分の死が見える。すごく辛いことなのだろう。見えた後の五年間、どう過ごすのだろう。

ロゼは、考えただけで、胸がはち切れそうになった。

「……あのさ」シャルゴが、突然口を開いた。

「オレ、なんで君たちについていつているのか、分かんないんだけど。じいちゃんみたいに『先読み』が強いからさ、ちゃんと説明してくれなきゃわかんないよ」

「ああ、そうだよ。僕も、カーニャにロゼが、説明しているときに、ちよつと上の空だったからさ。あんまり覚えていないんだよね。……あれ？何で泣いてんのさ、ロゼ」

「え？」

ロゼは、知らない間に、大粒の涙をこぼしていた。

7

ロゼは、闇の中にいた。

自分も認識できないほどの、闇だった。

声を出してみる。何も聞こえなかった。

それ以前に、ロゼ以外に誰も居ないのだから、声を出す必要がないのかもしれない。

歩いてみる。

何か障害物があるのか、歩きにくかった。

ドロツとしたゼリー状の、空気。

これが、障害物の正体……なのかもしれない。

怖くはなかった。

何も思っていないかった。

それが、逆に怖いのかもしれない。

今、自分は何も考えていなかった。

そのとき、幼いときに考え、そして、封鎖した考えが、一気によみがえった。

ロゼは、小さい時から、いつも何かしら考えていた。

あるとき思った。考えないという状態は、どういう事だろう、と。

実際にやってみようとした。が、考えないようにと考えてしまい、考えないということは出来なかった。

その次に、どうして出来ないのか、と考えた。

長い時間考えたあげく、答えが出た。

出たときに、ゾツとした。

なんてことを自分は考えているのだろうか。

その答えとは、考えることは、生きている証拠なのということ。眠っているときさえも、夢を見る。

つまり、考えているのだ。

だから、考えないをするには、生きる自体をやめる。つまり、死ぬことだった。

ゾクツとしたと同時に、ロゼはこの疑問に対する考えをやめて、次に考えることを探した。

ロゼは思った。

自分は今死んでいたのだろうか、と。

闇の中で、幼いときの恐ろしい考えがよみがえり、ロゼは、急に怖くなった。

そのとき。

「……………」

何かが聞こえた。

小さすぎてよく聞こえなかったが、確かに、何かが聞こえた。

「……………」ほら、また。

ロゼは、自分以外に、誰かがいると安心した。

そして、恐らく音の主がいるだろう方向へ、重い空気の中を進んだ。

「……………」チリカ」

「え？」ロゼは、思わず聞き返した。と同時に、さっきまで、聞こえなかった自分の声が聞こえることに気がついた。

「……………」チリカを探して」

「チリカ？……………」何、それ」ロゼはつぶやく。聞きなれている自分の声に多少の安心感が得られた。

「チリカを探して。チリカを探して」声は、だんだんと大きくなっているような気がした。

「……………」ロゼの安心は、吹き飛ばされそうだった。

ずっと、声のするほうへ歩き続けているのに、なかなか着かない。それなのに、声はどんどん大きくなる。不安も大きくなる。そして、反比例のように安心が小さくなる。

[illegible]

ロゼは耳をふさいだ。

安心はもう、台風が過ぎ去り、雨雲が無くなるように、きれいなサッパリと、無くなっていた。安心が零になったら、さっきの反比例と同じく、不安が口ゼをおおいつくす。

耳をふさいでも、効果はなかった。

頭全体が、耳にでもなつたかのように、その声を、受け止めていた。

「チリ力を探して。チリ力を探して。チリ力を探して。チリ力を
探して。チリ力を探して。チリ力を探して。チリ力を探して。チリ
力を探して。チリ力を探して。チリ力を探して。チリ力を探して。
チリ力を探して。チリ力を探して。チリ力を探して。チリ力を
探して。チリ力を探して。チリ力を探して。チリ力を探して。チリ
力を」

「もう、やめて！」

急に静かになった。

ロゼは、気を失うように……眠りから覚めた。

「それが、悪夢なの？」ライは、ロゼの顔をのぞき込むようにして、聞いた。

「……はい」ロゼは、ずつとうつむいたまま、しゃべっていた。
「……ふーん。シャルゴはどう思う？」

「何が？」シャルゴは、足元の石を見ながらつぶやく。

「何がって……、チリカはなんだろうね。とか………まあ、そんなところ」

ライは、顔をしかめながら言った。

「チリカはなんだろうね」シャルゴは、顔を上げながらつぶやいた。

「……君、ふざけてるでしょ」

「うん」

「……カーニヤがいたら、このクソ坊主とか言っていただろうね」
「言わないでしょう。カーニヤさんは、いい人ですから」ロゼは、ニコリと笑いながら言った。

「………」ライは、ロゼの笑った顔を始めてみた気がした。

「どうかしました？」

「……いや、とにかく、それが全部なんだよね。悪夢の話は」

「ええ」ロゼは、うなずいた。さっきの笑顔はすでに消えていた。

「……それを毎日見る」シャルゴは、ぼそりと言った。

「うん、それを今、聞こうと思ったところ」

恐らく、『先読み』を使ったのだろう。ライがロゼに『毎日見るのか』という質問をしている未来をみたのだ。

ライはうなずいた。

なるほど、時間の短縮という訳か。いかにもシャルゴらしい。

「オレのこと、何も知らないくせに」

ほら、また言おうとしていたことを言われた。
ライは、なぜだか面白くなってきた。

「さつきから、何を話しているんです？」

ロゼは、首をかしげた。

いつの間にか、夜になっていた。

三人は、まだリンから抜け出せていないため、野宿をすることにした。

「ここから、クウクは遠いんですか？」ロゼは、焚き火の炎を見ながら言った。

「うん、かなり歩くことになるね。魔法で飛んで行ってもいいけど、シャルゴは飛べないだろ」

「オレは、足手まといかよ」フンと鼻を鳴らすシャルゴ。

「いや、君は役に立つからね。足手まといには、絶対ならないよ」
「でも、オレ、飛べないし」

「リンの住人だから、当たり前だよ。今は、飛ぶことよりも、『先読み』の方が、重要な気がするんだ」

「……………」ライには分からないが、シャルゴは沈黙した。
分からないので、ライも、沈黙した。

ロゼは、何故二人が、急に押し黙ったのか分からなかったので、沈黙した。

ふしぎな沈黙がその場を包んだ。

ヒュオ。

そのとき、冷たい風が、三人のほほをなでた。

そして、ゴロゴロという音。

その音を聞いて、シャルゴはすばやく立った。

「あらしが、来る！」

シャルゴは、あたりを見渡すと、ライに向かって言った。

「もうすぐ、やって来る！オレ、じいちゃんの手伝いしてくるから、ここにいて！」

「僕も行くよ！」ライも立ち上がる。が、時すでに遅し。シャル

ゴは、それこそあらしのように、森の中に入っていった。

「……………どうして？」

だんだんと強くなってくる風に目を細めながら、ロゼはつぶやいた。

「そう、リンの『先読み』では、あらしは一カ月後のはずだった。なのに、今来ている。　リンの『先読み』が間違っていたのか？　いや、そんなはずは……………」

ライは、森を見すえながら、つぶやいた。

「とにかく、ここにいては、危険です。近くの家には非難しましうう」

「うん……………」

そのあらしは、リンの歴史に名を刻むほどの勢いだった。

木々が生い茂るリンが、一晩で、荒地と化した。

樹齡何千年もの木々がたおれ、枯れていった。

行き場をなくした動物たちが、死んでいった。

家のほとんどが全壊状態になった。

今まで、リンの端から端まで、木や家で見わたせなかったのが、見わたせるようになった。

いや、ほとんどのリンの住人は、その状況から目を伏せた。見ることは出来るが、見ようとしなかった。

ロゼは、腕に軽い傷を負っていた。魔法で自分の身は守ったものの、それを打ち破るほどの威力があった。

一方ライは、自分の身ばかりではなく、リン全体の住民を魔法で助け、結果的に、ロゼの傷だけで、全員が無傷だった。

ロゼは、自分も守ってくれたらよかったのにと思ったが、そんなに人にかまってもらうのも好きではないので、黙っていた。

「なぜじゃ……………」シャルントは、さっきから頭をかきむしっていた。

ロゼには、シャルントが、さらに小さくなったように見えた。

その老人に、かける言葉をさがしたが、見つけることは出来なかった。

「突然、ライが、呪文を唱えはじめた。それはロゼが聞いたことのないものだった。

ライは、目をつぶり、手を下にして、空に向かってブツブツと言っていた。

まるで、宇宙人を呼び寄せるかのようなだった。が、そのような怪しさは皆無だった。

ロゼは、ライの『呪文の声』を始めて聞いた。

それは、聞いているものの感覚をマヒさせるような、美しさがあった。

『呪文の声』とは、普段の声とは違く、これから術をかけますよと、『術の精霊』に伝えるための声であった。普段の声でやると、まったく術はきかない。

ロゼは知らなかったが、カーニヤほどの魔法使いになると、普段の声が『呪文の声』にすることができ、わざわざ魔法を使って、声をかえる必要はないのだそうだ。

ちなみに、ロゼの『呪文の声』は、普段の声とはまったく違い、地獄のそこから聞こえてくるような声であった。

ライは、その美しい声で、五分ほど呪文を唱えた。

そこにいたリンの住人は、その美しさに酔いしれ、リン全体が元の緑が生い茂る森に戻っていることに気がつかなかった。

「何故、怒っていたんでしょね。シャルントさんは感謝しているようにしたけど」

ロゼは、微かに怒った顔を見せながら、ライに言った。

「当たり前だよ、リンの『先読み』が当たらなかった上に、マクニに奴に、元通りにされちゃったからね。リンは、他の区域よりもプライドが高いから、自分たちの信じるものが、なくなったんだよ。それに、シャルントじいさんは、リンの長だ。区域に一つあるといわれる宝玉を守る長だ。プライドが傷つけられたとしても、元に戻ったんだ。自分より、リンを一番に考える　それが長だ」

「そうですか。……でも、何でライさんは、分かっている、元通りにしたんですか？」

悔しかった。と言え、この低い魔力の子は納得するだろうか。

ライは、ロゼの質問に答えなくて、考えた。
いや、無理だな。

ライは、すぐに答えを出した。

ロゼだけじゃない。誰にも分からないだろう。
なぜって、自分でも分からないのだから。

あのと時　　リンがあらして、全壊状態だったとき。

ライは、ライではなかった。

異常なことがあると、パニックになってしまう。

そして、さまざまな感情がうごめき、自分か思っていることと、
反対のことをしてしまう。

自分が自分ではなくなるのだ。

その状態がライの、一番嫌いな状態だった。

だから、異常なことが起きても正常に保とうとした。反対の自分

を外に出さないようにした。

出来なかった。それが、ライは、とっても悔しかった。
カーニヤにはかなわずとも、ライは、魔力は相当なものを持っている。

手足が思うように動かない。

それじゃあ魔法をかけよう。

体を少し浮かせよう。

皆に気づかれないうちにしよう。

何でも出来た。

出来ないものはないと思っていた。

魔法があれば、これさえあれば、何でも出来る。

それが、これだ。

あらしが来て、リンがめちやくちゃになった。

何故、未然に防げなかった？ 何でも出来るんじゃないのか

.....

「ライさん、ライさん」ロゼがライを呼んでいた。

「なに？」ライは、少しぶっきらぼうに、答えた。

「これからどこに行きます？ シャルゴくんは、帰ってしまいま
したし.....」

そう、シャルゴは、両目に涙を浮かべて、ライをにらみつけて去
っていったのだ。

「.....」

もう、ライはロゼの悪夢を解決することが、いやになってきた。

『そんなこと、言うもんじゃないよ』ズキリという頭の痛みとと
もに、カーニヤの声が、ライの頭に響いた。

『そんなこと言ってもさ、もう、どこ行ったらいいか分かんない
よ』ライは、魔法を使って、カーニヤに返事をした。

そして思う、カーニヤは、ライの行動と思考を今まで全部読んで
いたのだろうか。その可能性は十分にありえた。ライは、すこしム
ツとした。今度は、思考を読まれないように訓練しなければいけな

いな……………。

『……………クウクに行け』数分の沈黙の後、カーニャは、言った。
『……………クウク』

昨晚、ロゼとシャルゴと共に、行こうとしていた所だった。

『そうじゃ、そしたら、全てが分かるじやろう。……………シャルゴがいなくても、何とかなるじやろうて』

プツン。ライの頭の中で、カーニャの魔法が切れた音がした。
「なぜ、最初からカーニャさんが、来てくれなかったのでしょうか？全て分かっているようすでしたよね」そのロゼの言葉をきいて、ライは、目が飛び出しているのではないかと思った。

「え？なんで、ロゼが知っているの？」

「……………だって、カーニャさん、私にも魔法で話しかけてくれましたから。ライさんの声も、聞こえていましたよ」

「ああ、そう……………」

それは、絶対にありえない。

ライは返事をしながらそう思っていた。魔法で話をするというのは、送信者一人に対して、受信者一人であり、二人で会話をするものだ。三人でなんて、いくらカーニャの魔力が強いといっても、それは不可能である。

だが、ロゼは、ライとカーニャの会話を知っていた。
どうしてか。

ライは考えた。それは、ロゼが魔法でライの思考を読んでいたからだ。

ロゼは、魔法を使った後に出る匂いがなかった。いや、匂いすらなくとも、意識的に、魔法を使っていれば、何らかの変化が見られるはずだ。

だとしたら、無意識のうちにやっていたのか……………。
もしかしたら、ロゼは、そうとうな魔力を持っているかもしれない。
い。

ライはそう思っていた。

「チリカ？うん、知ってるよ。海に住む神のことでしょ」
まさか、こんなにも早く、チリカのことがか分かつとは、思いもしなかつた。

ロゼは、決して比喩ではなく、開いた口がふさがらなかつた。
隣を見ると、ライも、同じ状況にあつた。

クウク（飛行研究区域） は、その名の通り、『飛び』を得意とする、背中に蝶のような羽の生えた住民が、あちらこちらに見える区域だつた。

ロゼとライは、きれいな濃い青色の羽を持つ住人を捕まえて、さつそく聞いてみたら、この通り、口がふさがらなくなつてしまつたのだ。

濃い青色の羽を持つ少女は、キリアといつた。ロゼとライより、少し年上のおうだつた。

「でも、それつて、おとぎ話の中で登場する神でしょ。実際にいるわけないじゃない」

「お、おとぎ話ですか……」ロゼはそつつぶやくと、開いていた口を閉じた。

「そのおとぎ話、聞かせてもらえますか？」ライは、微笑みながら言つた。

「別にいいけど……よく覚えてないなあ」キリアは、羽と同じ色のショートカットの髪をかきむしりながら言つた。

「家になら、その絵本があるかも。来る？」

「はい」

ロゼとライは、同時に答えていた。

「何にもないですね……」

ロゼは、キリアの家に行く途中、周りを見渡しながら言った。
クウクの土地を取り囲むようにして大きな家が十二軒あり、クウク
の中心に大きな木が三本、トライアングルのようにあるだけで、
ほかには何もない、平地が広がっているのみだった。

「当たり前、私たちは空を飛ぶんだから、何もないほうが、着陸
のときに便利でしょ」

「でも、あの三本の木はなんですか？マクニでは見たことのない
木だよ、ロゼ」

「はい……、リンでも見かけませんでしたけど」

「そりゃそうさ、あの木は、クウクでしか育たない木だからね。
上に向かって風を起こすのさ」

「風……？」

キリアはうなずくと、木のでっぺんを指差した。

「あの辺から、風が出る。小さい子なんかは、まだ風に乗って空
を飛ぶことは出来ないから、あの木で練習するのさ。風がまったく
ないって日には、大人だって使うときもある」

「へえー、そうなんだ」

しばらく、歩くとキリアの家に着いた。

「ここは、わたしの家族の家だけじゃない。ほかの家族も一緒に
住んでいる。ほかの十一の家も全部一緒だよ」

「マクニと全然違うなあ」

キリアは、二階の（この家は五階建て）部屋に着くと、ブツブツ
と独り言を言いながら、絵本を探し始めた。

その部屋は、書斎らしく、二メートルぐらいの天井までの高さの
本棚が壁一面に広がっていた。

古本の香りがする。ロゼは、この香りが好きだった。

「僕、この臭いはなかなか好きになれないな」ライが顔をしかめ
ている。

人の好みはこうも違うものかと、ロゼは感心していた。

「うーん、ないなあ」キリアは、羽をせわしなく動かしながら、本棚を行ったりきたりしている。

「あの、題名って分かりますか？ 私たちも探します」

ロゼは、そういうと、『呪文の声』 地獄のそこから聞こえてくるような声 で自分自身に術をかけると、透明な階段を上るかのように、一步一步、空中にいるキリアに近づいていった。

「『海の中の住人たち』 だったと思う」キリアはロゼが近づいてくると言った。

「魔法で探せばいいんじゃないの？」

ライは、音もなくキリアとロゼに近づくと、また、あの美しい『呪文の声』を発した。

すると、下のほうにある一冊の本が、スウーッと音もなく浮かび上がり、ライの手に収まった。

その本は、確かに『海の中の住人たち』であり、表紙には、カールしたブロンド色の長髪の女性が美しく描かれていた。

「この人が、チリカ……………」

むかしむかしのことでした。

海底には、さまざまな区域の住人がすんでいました。

マクニ、リン、クウクをはじめとする五十もの住人が、一つの力リトという区域となつて、すんでいたのです。

リンは木ではなく海藻を育て、クウクは海水の中を鳥のように泳いでいました。

それはそれは幸せな生活でした。

ある日のことです。住人たちは、ふしぎなことに気がつきました。海には、水があるが、では、外の太陽が直接照る地面では、どうなっているのだろうか、と。

そうなのです。カリトの住人たちは、海以外の世界をまだ見たことがないのでした。

カリトの住人は、好奇心が旺盛でした。

気になることがあれば、すぐにでも飛んでいって、確かめてみたい。と思っていました。

そこで、みなで外に出てみようということになりました。

ところがそれを、カリトの長、チリカが止めました。

外に出てはいけない。外に出てはいけない。

それしか、チリカは言いませんでした。

カリトの住人が何度も聞いても、首をたてには振りませんでした。カリトの住人は、一時期外に出ることをあきらめました。が、一度気になりだすと、住人の意識は、外の世界へと飛んでいきました。

クウクは、もうろうとして、サンゴ礁に頭をぶつけ、リンは、海藻をせんていしようとして切り裂き、マクニは、砂の城を作ろうとして、失敗しました。

カリトは大変なことになりました。

カリトの住人は、ガマンが出来なくなり、チリカの忠告も聞かずに、海から外へ、飛び出していきました。

深い海の奥底で暮らしていたカリトの住人には、太陽の光はあまりにもまぶしすぎました。

その光で、ほとんどの者の目が、視力を失いました。

海水から酸素を得ていたカリトの住人は、ほかの方法で、酸素の得る方法を知りませんでした。

酸素不足で、海に戻ろうにも、目が見えないので、もう、どこが海かが分かりませんでした。

数え切れないほどのカリトの住人が砂浜で、息絶えました。

海には、クウクがぶつかったサンゴ礁、リンが切り裂いた海藻、マクニが失敗した砂の城と、チリカが残されました。

チリカの悲しみは、それは深いものでした。

チリカが、本当のこと説明したところで、カリトの住人は理解できただけでしょうか。

冗談を言っているばかり、思うのではないのでしょうか。

以前あったその思いは、チリカには、なくなりました。

なぜ、きつく止めることができなかったのか。

分かっているのに、なぜ言わなかったのか。

その疑問が、チリカの頭の中で、渦巻きました。

チリカは、リンの区域の住人でした。

『先読み』は、誰にも負けない自信がありました。

ですが、チリカは、カリトの住人には秘密にいていました。

カリトの長がリンと知れたら、リンは得意になってしまい、ほかの住人よりえらいんだと思い込んでしまって、区域差別が起こるのではないかと、心配したからでした。

今となっては、住人がいないのですから、差別など起こるはずがありません。

言うべきでした。

自分はリンの住人だと。そうしたら、カリトの住人は信用してくれ、こんなことには、ならなかったはずです。

なぜ、そのことが『先読み』で知ることが出来なかったのか。

チリカは、自分の能力の中途半端さに、腹が立ってきました。

誰にも負ける自信がなかった『先読み』で、自分が負けたような気がしました。

チリカは、悲しみのあまり、数ヶ月の後、暗い海底で、息絶えしました。

その、チリカの魂は、あまりにも住人を思う気持ちから、神となりました。

チリカは、今も、自分がしたことを悔やみながら、海の平和を守っているということです。

「はー、なかなか暗い話ですね」ライが感想を言う。

キリアは、羽をパタリと動かして、それに応じた。

「作り話だろうけど、ここまで悲しくせんでもねえ」

「どうして作り話だと、分かっているんです？」ライが小首をかしげた。

「そりゃそうさ、作者は、ツェンター・カロコ。サクリ（文字作成区域）の絵本作家が書いたものだからさ」

「……ツェンター・カロコ？」ライは、聞いたことがなかった。

そもそも、ライは本というものをあまり読んだことがない。

「……………わたし、この話、どこかで聞いたことあるかも知れないです」

突然、黙っていたロゼが口を開いた。

「ええ？」

ライは、耳を疑った。と同時に、嬉しくなった。とうとう、ロゼの悪夢の正体を突き止めた！

「分かったよ、ロゼ。ロゼは子供のころ、この本を読んだんだろう。小さい子には、この話は怖かったのかもしれない。カリトの住人たちに何も教えなかったチリカを、とても恐れていたんだ。海に住む者が、地上に出たときの恐ろしさを知っていたのにわざと見殺しにしたんだってね。そして、数年たって、この本を読んだことを忘れてしまったけど、「チリカがとても怖い」ということだけは、印象深くて、記憶の奥底に眠っていたんだ。それで、あるとき、奥底で眠っていた、記憶が呼び戻されて、悪夢として蘇ったんだ！」

ライは、興奮して、ペラペラと話した。

「そう、ロゼの悪夢の原因は、この本にあったんだ！」やったぞ。これで、もうおしまいだ。そう思っていたライの、すがすがしい

心に、一本の矢が刺さった。

「それは、ありえません。わたしは、今まで数多くの本を読んできましたが、すべてを記憶しています」

「……………はい？」

「あのさあ」

困惑しているライの隣で黙って聞いていたキリアが、これまた困惑ぎみに話した。

「さつきから、悪夢とかつて話してたけど、なに？それは」

「ああ、それは」

ライは、ロゼの悪夢のことを説明した。

キリアはフムフムと聞きながら、話の途中で「はあー」というため息や「ロゼはたいへんだなあ」などと、いちいち感想を言うので説明するのにえらく時間がかかった。

「なるほどね。それで、そのライの解釈か……。だけど、ロゼは全部記憶しているぞ、と……………」

キリアは、ウーンと腕くみをしながら、なにやら考え始めた。

数分後。

「よし。今から、テストをやるう」

唐突に言われたその一言に、ライとロゼは困惑した。

「ロゼは今まで読んだ、本をなるべく古い順から言ってくれ。ライは、その本を探して、わたしに渡す。またロゼに、作者と出版日を言ってもらう。あたしが、持っている本と、ぴったりに合えば合格だ！」

なぜ、こんなにもキリアは楽しそうなのだろう。そして、合格とは……。という、ロゼとライの疑問は無視して、キリアが、「さあ、早く早く！」と、ロゼをせきたてていた。

ロゼは、軽く目をつぶると、頭の中の引き出しから、今まで呼んできた本の詳細のリストを取り出した。

「まずは、『風の支社』という本です。三才のときに初めて読んだ小説です」

「ライ、探して」キリアは、ライが魔法で探し出した本を、手に持った。

「はい、作者と出版日は？」

「……マサラ・コンツェール。サクリ暦三六二五年の五月二十日出版です」

「正解。……すごいねえ。感心する」キリアの感嘆を無視し、ロゼは先に進めた。

「『昔、今、明日』作者は、サラク・ミタゴラニユ。出版は、サクリ暦三六五三年の八月二十八日……です」

「正解 読んだ年は？」

「……七才のとき……です」

「フーン。本当に、すごいねえ。 ねえ、ライ」

「は、はい……」

ライは、本棚に、もたれかかってボーとしていた。

魔法を使って、疲れたのだろうか、ロゼは思った。

「ひとまず、合格。これで、ロゼの記憶力は証明された」

キリアは、ライにニツコリと微笑みかけた。

「ライの解釈ではなかったようね」

「まあ、そうですね」

ライは、ため息をついた。

「とりあえず、サクリに行つて、『海の中の住人たち』の本の作者に会つてきます」

「ああ、それがいいと思うね。なんなら、わたしも行ってあげようか？ひまだし。一を聞いたなら十まで知りたいし」

キリアは、目をキラキラさせながら言った。本当は、行きたくてたまらないのだろう。

ロゼも、本好きなら一度は行つてみたいといわれる、サクリに行くことに、胸を踊らせていた。

ライは、キリアの手を強くにぎるところ言った。

「ぜひ、一緒に来てください」

ライの熱心な目の裏を、ロゼはまだ、知る由もなかった。

サクリに行く途中、キリアの発した言葉に、ロゼとライは、またしても口を開けることになった。

「あのさあ、さっきから思ってたんだけど、どうしてライの魔法でロゼの悪魔の正体を、見つけようとしないわけ？」

「そうだった！」ビックリマークが百個くらいつきそうな勢いで、ライが言った。

一方ロゼは、口ばかりが目まで見開いていた。

今までたくさんの方がありすぎて、こんな簡単な方法を、忘れていたことをキリアが教えてくれたことに、ロゼは感謝した。

「……はは、もうすでにやっているのかと思った」

キリアは苦笑した。

16

「それじゃ、ロゼ、その石に座って」

ライは、ロゼが石に座るのを見届けてから、静かに目をつぶった。キリアは、自分にも魔法がかかったら怖いからと、木の陰に隠れていた。

そんなこと心配することないのに、ライはそう思った。

「

」

『呪文の声』で、ライはロゼに術をかけた。

目をつぶった真っ暗な頭の中で、ライは呪文を唱える。

そして、ロゼの頭の中に入り、原因を探っていく。

十分ぐらいたったのあと、ライは静かに目を開けた。

のちにキリアは、木の陰から見ても分かるくらい、へびのような恐ろしい目だったと、語った。

ロゼは、目をつぶっていた。

まるで、眠っているかのように安らかな顔だった。

ロゼは、フツと目を開けると、「もう、終わったのですか？」と、たずねた。

ライは、静かにうなずくと、その恐ろしい目をロゼに向けた。

ロゼは、一瞬たじろいだ。が、すぐに微笑んだ。

「分かったのですね？悪夢の原因が」

「……………うん」

そう、ライは、知ってしまった。

分かってしまった。

ロゼの悪夢の原因が。

そして、ロゼの正体が。

「行こう」

ライは、静かに言った。

「サクリヘですか？そこに、わたしの悪夢の原因があるのですか？」

ロゼは何も知らないのか。本当に知らないのか。と、ライは思った。

「教えてください。わたしの悪夢の原因を」

ライは、首を横にふった。

「どうして、教えないのさ。元はと言えばこれは、ロゼの問題だろう。どうして、隠す必要がある？」

いつの間にか、木の陰から帰ってきたキリアが、言う。

もつともだ。

ライは思った。

もつともだ。だけど、こればかりは……。ライは、キリアを無

視して、言った。

「行こう。カリトへ」

キリアは、さきほどから機嫌が悪かった。

ロゼは、前にキリアが言っていた「一を知ったら十まで知りたい」という言葉は本当だったんだと、思っていた。

そして、前に読んだ本で、クウクの住人は学問への好奇心がほかの区域に比べて、はるかに高いということを思い出していた。

その証拠に、キリアの家のたくさんの本たちが物語っていた。

「教える、ライ」

言葉使いもどんどん悪くなってきた気がする。早く、なんとかしなければと、ロゼはハラハラしていた。

それにかまわず、ライは、無言でロゼとキリアの前を歩いていた。

「……………ライさん？」ロゼは、少し早歩きして、ライの顔をのぞきこんだ。

「……………なに」ロゼは、ライの表情を見て、「いいえ、なんでもありません……………」と、引き下がった。

しばし、三人は無言で歩いた。

ロゼは、まわりの景色を見た。

細い一本道だった。

まわりには、木が生い茂っていて、まるで、トンネルのようになっていた。

葉と葉の間から、太陽の光がこぼれている。

地面には、ロゼの知らない薬草がいっぱい生えていて、木の根も顔を出していた。

油断すると、足を取られそうになる。

この道が、海へとつながる、ただひとつの道だった。

とても涼しく、気持ちのいい朝だった。

昨日は暗くなったので、キリアの家に泊まり、朝早くから出発し

た。ライは、泊まることを決めた。早く、海に行きたいようだった。海に カリトに何かがあるのだろう。ロゼは、とても楽しみだった。

カーニャに薬草をもらってから、今まで、一度も悪夢を見なかった。やはり、大魔法使いがくれたものは効果絶大だったのだ。

だが、いくらカーニャの薬草とはいえ、心に残るモヤモヤまでもなくすることはできなかった。

それを、ライが知っている。

カリトに行けば、分かるのだろうか。

この得体の知れない恐怖を、ぬぐいさることが出来るのだろうか。

「さあ、着いた」ライの言葉で、ロゼは顔を上げた。

今までの狭いトンネルから一変。どこまでも続く、海。そして砂浜が広がっていた。

「ここで、カリトが息絶えたんだ……」

キリアが、しみじみと海を眺めていた。

「ええ……そうですね」ロゼも、海を見た。

「これから、海に入る。カリトは海に住んでいたのだから、住居跡は残っているはず。それを探す」突然のライの言葉に、ロゼとキリアは、とんでもないと首を振った。

「わたし、泳げません」

「あたしも……羽がぬれたら大変！」

「キリアさんは、ここで待っていてください。……………ロゼは、魔法をかければいいじゃないか」

「ああ、そうか……」

ロゼは納得すると、自分に魔法をかけ始めた。

体全体が、ぬれないように。それと、海の中で息が出来るようになるべく疲れないように。

「待て。あたしも行く。一を知ったら百まで知れ。これがあたしのポリシィ！あたしにも、魔法をかけて」十から百に増えたような気がするが、ロゼは黙っていた。

今なにか余計なことを言うと、キリアにかみ付かれそうな気がしたからだ。

「でも、キリアさん、さっき口ゼに魔法をかけたとき、木の陰に隠れていたじゃないですか。怖いのはなかったのですか？」

キリアは、ライの言葉を無視して「早く早く」とせきたてていた。

「しょうがないな」ライは、軽くため息をつくとき、自分とキリアに魔法をかけ始めた。

三人は海の中に入っていた。

「わたし、海って初めて。すごいなあ」執拗に感心しているのはキリアだった。

キリアは、羽があるので、ほかの二人よりも、ゆっくりと進んでいた。

「ね、ライとロゼは、海は初めて？」

「マクニは、山奥にあるんですよ。そうそう行けるもんじゃありませんよ」ライが苦笑しながらそれに答える。

「ああ、そうか……。それじゃ、三人とも海は初めてか」

「ええ……まあ……」

「もっと、深いところに行ってみますか」

ライは、そういうと、どんどん深いところに潜っていく。

「あつ、ちよつとまってよ」

キリアが慌てて追いかけようとするが、慌てれば慌てるほど、進まない。見かねたロゼは、泳ぎ方を教えた。

「キリアさん。足を曲げないでゆっくり動かして、手を前の水をかき分けるように動かしながら、進んでください」

「あ、進んだ進んだ。ロゼ、教えるのうまいね。実は、海に来たことあるんじゃないの？」キリアはニツコリとロゼに微笑みかけた。

「えっ……………ないと思いますけど」ロゼは、自問自答をする。海に来たことがあるのか。

最近では、なかったような気がする。

では、昔は？

「……………」

思い出せない。

どうしてだろう。

ロゼは、自分の頭を軽く叩いた。

思い出せ……。思い出せ……。

「うわー、なになに、この魚！きれい！」

キリアは突然、黄色い魚を指差して、歓声を上げる。

「ああ、それは、キイロチャントルという魚です。他にも、赤、だいたい、黄緑、緑、青、紫の色があって、群れになって泳ぐさまは、虹のようです」

「へえー……………」魚をさわろうとするキリア。

「ですが、気を付けてください。地上とはちがって、大きいものが強いのではないのです」

「どういうこと？」

「小さいものが強いのです。集団となって、大きな魚を食料とします。それに、頭もいい」

「そんなこといつても、大きいほうが、強いに決まっているわよ」
「いいえ、そうではありません。小さい魚には、鋭い牙がありませんし、大きい魚には、それがありません。小さい魚は、大きい魚に食べられそうになったら、すばやいですから、すぐに逃げるのが出来ます。大きい魚はその分、水の抵抗が大きいですから、追いかけることは無理です」

「ほー、くわしいね。それじゃあ、大きい魚は、何を食べているわけ？」

「海藻です」

「なるほど」

キリアは、海水の中で、腕くみをしながら、大きくうなずいた。
なぜ、こんなにも、くわしいのだろう。

またロゼは自問自答をする。

本で読んだから？

誰かに聞いたから？

いや、ちがう。

そんなこと、記憶にない。と、いうことは……。

実際に見たからだ。

ロゼは、ゴクリと、つばを飲んだ。

「おそいよ」ライがいつの間にか戻ってきて、ロゼとキリアの手を引っぱった。

「着いてきて。見つけたよ、住居跡」

19

「うつ、わあー」

キリアは、感激していた。

海の中に、人が住んでいたなんて。あの話は、本当だったんだ…

…。

石の階段がある。

壁があつて、部屋になっている。

これは、ベッドかな。

でも、石だからよく眠れないだろうなあ。

あ、このホールみたいところで、集会とか開いていたんだろうか……。

うわっ、こつちにはすべり台がある！すごい！ちよつとすべつてみようかな……。

泳ぎながら、夢中になって石の町並みを見ていたキリアは、ふと足元に何かがあることに気が付いた。

「あれ？」

岩のかげに隠れていて今まで気付かなかったが、足元に、十数輪の花が、ゆらゆらと揺れていた。

「きれい……」

どうしてここに花があるのだろう。

キリアは考える。

さっき、ロゼは、小さい魚のぼうが、大きい魚より強いというよなことを言った。

ここでは、反対のことが起きるのかもしれない。

普段、土に根を張って生きている花たちが、海で生きているんだ。うん、きつとそう。

摘んでしまおうかな。

いや、きれいだから、そのままにしておこう。

ふと、ライとロゼがいらないことに気がついた。

一人になると、急に心細くなるキリアは、二人の姿を探した。

「あ、いた」ちょうど、石の壁に隠れて見えなかっただけだった。

キリアは、この中で一番年上なのに、あせっている自分を恥じた。

二人は、並んで、下を見ているようだった。その視線の先には…

…。

「……………花だ」今見た花よりも、ずっときれいな花が、揺れていた。

「わたしが、チリカだったのですね……」ロゼは、石の町並みを見ながら、言った。

ライが、見ると、ロゼのほほに涙が伝っていた。

「すべて、思い出しました」ロゼは、ニッコリと微笑んだ。

「ライさん、あなたは、魔法でわたしの頭の中を見る前に、分かっただけなのでは？」

「うん……。いや、正確には、いいえ、かな……。魔法で見て、確信が持てたから」

ライは、歩きながら、ポツリポツリと話し始めた。

「最初に変だなって思ったのは、ロゼ　チリカが、カーニヤの家の前で待っていたときなんだ。家に着くまでには、全身がドロドロになるくらい大変なんだけど、チリカはそうじゃなかった。そのあと、足が浮いているからだって思ったけど、それで、解決できるのは、足だけなんだ。手とかに、必ずドロが付くはずなんだよ。だから、魔法を使ってきれいにしたのかなと、思った。知ってた？魔法をつかったあとって、ほんとうに集中しないとわかんないんだけど、かすかな匂いがするんだ」

「あら、そうでしたの」ロゼ　チリカは微笑んだ。

「そう。そのときは、なにも匂いがしなかったから、魔法も何にも使っていないと思ったんだ。これが、最初に変だなって思った部分。でも、よく考えてみると簡単なんだ。チリカは、カーニヤに魔力を分けてもらったでしょう？」ライは、微笑んだ。

「よく、ご存知で」チリカも、微笑んだ。

「カーニヤが、客を外に待たせておくなんてありえないことなんだ。いくら人使いが荒いといっても、そこまでひどくはないよ。チリカも、聞いたろう？僕にカーニヤが、魔法で話しかけてきて、」

クウクに行け』って言ったとき。客を外に待たせて置くほどのやつが、アドバイスなんかするかな？僕は、しないと思うよ。弟子より客のほうが、大切に決まっているもの。だから、僕が帰ってくる前に、チリカを家の中に入れたんだ。カーニヤは、大魔法使いだからね。見ただけで、すぐ、チリカの記憶がなかったロゼを、海の神だと知ったんだ。そして、記憶がないことも知った。自分がマクニの住人だと思い込んでいることも知り、カーニヤは、チリカに気づかれないように魔力を分け、体のドロを魔法で落として、外で待っているように命じた。そして、うさぎのトラップを作っている僕に、魔法で呼びかけたんだ。『客が来ているから、早く帰って来い』ってね。カーニヤは、魔法を使った。だけど、匂いがしなかったんだ。どうしてだか分かる？あるとき、カーニヤは薬草を煮詰めていただろう。そのときに魔法の匂いか、薬草の匂いに負けちゃったんだよね」

「なぜ、カーニヤさんが、わたしを外に出したか、分かります？」
ライは、数分考えたのち、首を横に振った。

「あなたは、負けず嫌いで賢いわ。だけど、なにか足りないものがある。そうでしょう。カーニヤは、それを心配した。だから、わたしの悪夢の正体を突き止めると言い、旅に出させたのよ」

ライは、肩をすくめると、「チリカ、ロゼのときとずいぶん口調が、変わったね」と言った。

「さあ、続きを話して」チリカは微笑んだ。

ライは、もうここにいるのは、ロゼじゃないんだと思った。

「カーニヤがチリカに魔力を分けた　そう考えると、あとの疑問はすぐに解けたよ。さっき、カーニヤが、『クウクに行け』と、魔法で話かけてきたことを話したね。あときも、疑問があったんだ。話することが出来るのは、二人だけ。どうして、チリカが僕らの会話を、聞くことが出来たのか、と。それは、カーニヤとチリカは、魔力を分けたと言っても、共有していたことと同じなんだ。どちらかが、魔法を使えば、もう片方にも影響が出てくるんだ。聞

こえるのは、当たり前だね」

「そうだったのですか……。わたしもあの時は少しふしぎだったんですよ。魔法を使っていないのに、どうして、聞こえるのだろうか、とね」

「あとはね、キリアさんのテストだったんだ。ほら、題名と作者、出版日を答えるやつ。題名と作者まで、覚えているのは分かるよ。でも、出版日まで覚えるかなあ、そもそも、三歳で、出版日を見る子なんか見たことないよ。あのときは、魔法を使っただけでしょう？」

「ええ、でも、匂いで分かるのでは？」

「あのときは、僕も、本を探すために魔法を使っていたからね。魔法を使うときにでる匂いは、みんな一緒なんだよ。甘い、ハチミツの匂い」

「……………ああ、だから、キリアさんに熱心に「一緒に来てくれ」ってお願いしていたのですね。わたしの化けの皮をはがすために」

「うん、そう。キリアさんは、ちゃんとテストするために、出版日まで聞いたんだと思ってた。だけど、本当に驚いていたからね。」

「すごいなあ、ロゼは」って

「そうかしら、キリアさんは、本当にわたしを、試したんだと思いますよ」

「うーん、そうかな。まあ、いいや。それで、このことから、ロゼは、なんかおかしいなって思った。そのときは、悪夢とは別問題だっと思っていただけだね。チリカの頭の中を見て初めて、ロゼとチリカはイコールで結ばれたんだ」

話し終わってライは、チリカを見た。

チリカは、海水によって音は聞こえづらいが、割れんばかりの拍手をしていた。

「それじゃ、今度は、チリカの番だよ。どうして、カーニヤの家を訪ねたのか。あの夢は結局なんだったのか」

「まず、あの『海の中の住人たち』の本の内容を、訂正しなければなりませんね。最後に、『チリカの魂は、あまりにも住人と思う

気持ちから、神となりました』の部分だけけど、わたしは、神ではないわ。今でも、カリトの長、チリカ・ロゼです。そして、死んでもいない。今でも、ここに住んでいるわ」

「それじゃあ、どうして、陸に上がったの？」

「あのとき、わたしは、悲しくて、死んでいった住人たちのように、陸に上がって、死のうとしました。だけど、この海には、カリトだけではなく、まだ区域がたくさんあるのです。その人たちが、また陸に上がろうと考えたら、大変なことになる。そう考えたわたしは、『先読み』をしました。もう、二度としないと決めた、『先読み』をしたのです」

チリカは、いったん言葉を切ると、遠くを見て、また話し出した。「すると、数時間後のわたしの姿が見えました。数時間後のわたしは、ある言葉を唱えて、指先から、一輪の花を出したのです。そして、その花を海底の砂に埋めると、そのまま水面に顔を出したのです。そのわたしは、なんともなく、岸まで泳いでいって、歩き始めました。わたしは、すぐ、その方法を試しました」

「その数時間後のチリカは、どうやって、花を出す方法を知ったの？」

「数時間後のわたしは、『先読み』を使って、また数時間後のわたしを見たのでしょうか」

「……………それじゃ、チリカが花を出す方法を、数時間前のチリカが見たということですか」

「ええ、おそらくそうだと思います。その方法で、陸に上がったわたしは、自分が海から来たことを忘れていました。おそらく、その花に、記憶を吸い取られたと考えます。そして、なぜか、マクニに行かなくては。そう思ったのです」

「足を浮かせて歩いていたのは、海と陸では、重力が違うから、歩くのが大変だったからですか？」

「その通りです。海からきたことを、覚えていませんでしたから、なぜ歩くのがこんなにも辛いのか、とてもふしぎでした」

チリカは、クスリと笑うと、足元を指差した。

「これが、その花です」

ライは、花を見た。

それは、どんな色にも判断できないふしぎな色を持つ、とても小さな花だった。

「きれいだね」

「ええ……………」

しばらくの沈黙の後、チリカは言った。

「この花を、わたしのところに戻すには、どうしたらよいでしょう？」

「『先読み』で見てみては？」

「ああ、そうですね」チリカは、ニツコリと笑うと、『先読み』を開始した。

ライは、そのあいだひまなので、花をじっとみていた。

「ライ！」キリアの声が聞こえた。

「今まで、どこに行っていたんです？」

「そこら辺を、見てた。すごいよ、すべり台とかあった。

あ

れ、ロゼは、なにしているの？」

キリアはまだ知らないんだった。

ライは、思い出した。

あとで説明してやらなければ。

なにせ、一を知ったら百まで知らないと気がすまないようだから。

「分かりました」チリカが、『先読み』を終えていた。

「この花を」「花をつみとるチリカ。

「食べるそうです」チリカは花を口に入れた。小さいので、一口ですむようだ。

「ええっ、なんで食べんの？」キリアは目を丸くしている。

「それは、あとで説明します。それよりチリカ、これからどうする？」

チリカは、三つあみにしていたひもをほどいた。カールしたプロ

ンドの髪があらわれる。それは、あの絵本の表紙の人物だった。

「あ……………もしかして、ロゼがチリ力だったとか？」キリアは、引きつった笑顔をチリ力に向けた。

チリ力はニツコリと微笑んだ。

「わたしはこれから、海の中のほかの区域をまわって、陸に上される方法と注意すべき点を説明しようと思います」

「ああ、それがいいと思うね。記憶がなくならずに、陸に上される方法とかを研究したりとかするのでもいいかもね」

「それはいいですね。『先読み』でそれが可能か見てみますわ」
チリ力は微笑んだ。

「それでは……………ああ、カーニャさんにもらった魔力を、お返ししなければいけませんね」

「いや、カーニャに返す必要はないよ。カーニャの魔力って、それこそ、売るほどあるんだから」

「そうだったの」

キリアは、海を見ながらつぶやいた。

ライは、海から上がって、浜辺に座りながら、キリアに説明した。今度は、「はぁー」だの言わなかったので、短時間ですんだ。

「それじゃあ、結局あの夢は、なんだった訳？」

「たぶんだけど、ロゼが感じたあの重い空気は、海水だったと思うよ。空気より、水だと音が聞こえにくいからね」

「ふーん」キリアは、貝がらを拾いながら、返事をした。

「結局は、あの花がロゼに夢を見せていたんだと思うよ」

「へ？ どういうこと」

「キリアさんも、分かっていたでしょう。ロゼのときと、チリカのときは、口調がちよっと違ったでしょ。それは、花に記憶だけでなく、カリトの長としての人格も吸い取られていたんだと思うよ。その人格が、ロゼにチリカのことを思い出して欲しくて、夢を見させていたんじゃないかな」

「なるほどねー。って、ライも、あたしに対する口調が変わってない？ ちよっと前まで、敬語だったような気がする」

「あ、そうだった？ きつと、気のせいだよ」

「そうだったかなあ」

「そうそう」ライは、クスクスと笑い出した。キリアも笑い出す。しばし、二人は笑いあった。

「そういえば、あのツェンター・カロコは、どうして、カリトの話を知っていたんだろうね」ライが、思い出したように言った。

「ツェンター・カロコ？ 誰、それ」キリアが首をひねった。

「忘れたの？ 『海の中の住人たち』の作者だよ。カリトは、チ

リカ以外全滅したんでしょう？だれも知らないはずだよ」

「ああ、そういえば、そうだね……」

キリアは、うでを組んで考えはじめた。

「そう、たとえば、死んでいったカリトの人たちの魂みたいなのが、カロコさんに移り移って、絵本を書いた……とか」

「ないない」ライは、笑いながら、首を振った。

「それじゃあ、カリトは全滅したわけじゃなくて……、何人かは生き残っていて……、それがカロコさん……とか」

「ないない」

「そうかな。今は、けっこう自信あるのになあ」

「うーん、さっきのよりは、全然いいけど、ありえないよ」

「そうかなあ」

さっきまで、サンサンと照っていた太陽が、海に飲み込まれようとしていた。

まもなく夜になる。

だが、地面に日が当たるのは、もうすぐそこだ。

1

元に戻っている。すべてが。なにもかも。

死んでいった動物たちも、すべてが元通りになった。

木々は、空に向かって、突き刺さんばかりに背伸びびして。

花は、やさしい風にさそわれて、いますぐにでも、ワルツを踊りだしそうだった。

その光景は、昨日見た、リンと同じ。

まったく同じ。

あらしが、去ったあと、マクニの少年ライが、ほどこした魔法。それはそれは美しいものだった。

シャルゴは、今まで見てきたマクニの魔法の中で、最高に美しいものだと思った。

57

あのすばらしい声。もう一度聞きたい。

小鳥のさえずりのよう？ いや違う。

風のささやき？ 違う。

もっとう　　すべてを、包み込むような、やさしい声。

すばらしかった。ほんとうに。

だけど。

ちがうんだ。

シャルゴは、奥歯をかみしめた。

『先読み』が。

何の役にも立たなかった。

どうして？

他の区域にはない、『先読み』を使えるリンが『先読み』を失敗するなんて。

今までになかった。こんなこと。

『先読み』がリンからなくなったら、何のこる？

ただ単に、木を育てているだけじゃないか。

それは、それでいい。

だけ。

リンにとって、『先読み』は誇りだった。

そもそも、『先読み』は、今あった、あらしなどの自然災害を前もって知るためがあると、考えられている。

それが。

ライの魔法で、すべてが否定された気がした。

『先読み』なんかなくても、魔法があれば、リンを守ることが出来る。

そんなことを、あの魔法で言われた気がした。

確かに、そうかもしれない。

でも、ちがう。

自分の身は、自分で守りたい。

リンは、リンの住人が守るんだ。

確かめてやる。

確かめてやる。

どうして、『先読み』が失敗したのか。

あの、ロゼとかいうマクニの少女の悪夢退治なんて、もう、どうでもいい。

2

「……………シャルゴ、こっちに来るのじゃ」

「じいちゃん……………」少しやつれたような気がする。シャルゴは、シャルントのうしろ姿を見ながら、そう感じていた。

シャルゴは、シャルントの後について、家に入った。

木で出来ている家。一時期、全壊状態だった家。

シャルントは、木製のイスに腰を下ろすと、黙ったまま、空中をにらんでいた。

シャルゴは、台所へ行き、二人分のサルツシュという疲れが取れるとされる飲み物を、コップに注ぎ、シャルントの前のテーブルに置いた。

「ああ……………、ありがとう」

黙ってサルツシュに口をつける二人。

「……………」

黒い液体が、半分ほどになったとき。

「ふう、やはりサルツシュは、苦いのう」コップをテーブルの上に置くと、シャルントは、口を開いた。

「宝玉が、なくなっただんじゃ……………」

「えっ……………」シャルゴは、口を開けたまま、しばらく動けなかった。

そうか……………。『先読み』が失敗したわけは、これだったのか…………。

宝玉とは、五十以上あるとされる区域一つひとつを、守るとされる石だった。その石は、区域の長によって大切に守られてきた。

その石がなくなつたからといって、その区域の力がなくなるわけではないが、シャルントは、『先読み』が失敗した理由が、このことにあると感じていた。

リンの宝玉は、球体で、透明な中にうすい緑色の光が泳いでいた。大きさは、直径三センチ。

重さは、髪の毛一本分ほど。

その宝玉が、保管されている場所は、リンの長、シャルントしか知らない。

「いつからなくなつたのさ？」シャルゴは、気を取り直すと聞いた。

「うむ……。今日の朝にはあつた。昼にもあつた。夕方に見たら……なかつた」

今は、深夜である。

「ふーん。どこに置いてあるの？宝玉は」

「それは、教えるわけにはいかん」

「……………教えてよ。いずれ、オレがじいちゃんの後を引き継いで長になるんだろ」

「だめじゃ。それは、引き継ぐときに教えるもんじゃ」

「……………それじゃあ、なんで、オレに宝玉がなくなつたことを言つたんだよ」

「おまえが、次の長になる予定じゃからな」

「だつたら、場所を教えろよ！」

「だめじゃ！」

シャルゴは、ため息をつくとき、サルツシュを一口飲んだ。

「……………あらしで、どっかに飛ばされたんじゃないの。軽いんだし」

「いや、それはない。嚴重に縛つてあるからの」

「ふーん」

シャルゴは考える。

あらしの被害を受ける対策をしているということは、恐らく外だ。
「雨とかに打たれて、流されたりとかは？」

「いや、木々に守られているからの。雨に当たることはない」

よし、これで、外に宝玉があるということが確定になった。

シャルゴは、ほくそ笑んだ。

木々に守られているということは、木よりも、下の場所にあつて、地下ではなく、地上にあるということだ。

「なんか、葉っぱとかで包んでいたりしたら、誰かが持っていてちやうんじゃないの？」

「それもないのう。石の玉座に神々しく飾っておるから、だれも、さわらんじやろうて」

「へ？」

まさか、あれが、宝玉の場所だったとは。

シャルゴは、自然に、「ちよつと外に行ってくる」と行って、ドアを閉めるなり走り出した。

シャルゴがいなくなった家の中で、シャルントはサルツシュを飲んだ。

「ふう、あいつに、宝玉の場所を教えるのも大変じゃわい。長を受け継ぐときに、場所を教えるのが規則じゃからのう。これで、あいつが偶然にも宝玉の場所を知ってしまったことに、なればいいがのう」

「ここか……」

リンのはずれの山奥に、ひっそりとその主をなくした玉座があった。

確かに、木に守られている。が、その守られるものは、今はいない。

「どうして今までここだと気づかなかったんだらう」シャルゴはつぶやいた。

山奥とは言っても、シャルゴは結構ここに来ていたからだった。

隠している宝玉をこんな目立つところに置くはずがないという先入観からか。

「……………」

シャルゴは、石の玉座の周りを見ようとしたが、真っ暗で何も見えなかった。

「……ん？」なにか、甘いにおいがする。

これは……。

「なんだろう……」シャルゴは考える。

さっきまで気付かなかった。

深夜で何も見えなくなった今、視力の変わりに嗅覚が敏感になったのだろう。

花や木の蜜の匂いではなかった。

いつも嗅ぎなれている匂いとは違う。

でも、どこかでかいだ匂い。

「……………あっ！」

思い出した。

ライが使った、あの美しく、すばしかった魔法。

あのとき、ライの声に聞きほれて気がつかなかったが、確かに、匂っていた。

これと、同じ匂い。

もしかして、魔法を使ったときに出る匂いなのか。もしくは、ライの愛用している香水かなんかか。

「ライが、宝玉を取ったのか？」いや、リンについてから、ずっとシャルゴはライと行動をとみにしていた。あらしがくるまでは。

「そうか、ライが、魔法であらしを起こし、リンの住人があわてているすきに、宝玉を……………！」

なんてやつだ。

シャルゴは、奥歯をかみしめた。

「どうりで、『先読み』が失敗したはずだ！魔法で、いきなり起こしたあらしが分かるもんか！『先読み』は失敗していないんだ！」

シャルゴは、急いで、シャルントがいる家に向かって走った。
はやく、シャルントにこのことを知らせて、何とかしてもらわなければ！

3

「あー、それはない」話を聞くとシャルントは、首を横に振った。
「どうしてさ！ライが持ってたんだろ！」

「ライはのう、カーニヤの弟子じゃぞ。カーニヤとは子供のときからの付き合いじゃが、それはそれはしっかりした奴じゃ。そいつの弟子に限って、宝玉を盗むはずがない」

「そんなことない！……………オレ、ライを探しに行く。捕まえてやる！」

「まあまあ、早まるな」

「やだ！」

「やだつて、言われてものう」

「明日に備えてもうねるよ！」言うが早いがシャルゴは、寝室へと向かっていった。

「ふう、しょうがないのう」

シャルントは、イスからゆっくりと立ち上がると、自分の分とシャルゴの分のコップを手に取り、台所で洗い始めた。

次の日の朝。

「本当に、行くのかの」

「うん、必ず、宝玉を取り戻しに行くよ！」

「ライが、持っているとは思わんがのう」

「そんなことない！あいつは、悪い奴なんだから！」
シャルントは、ため息をついた。

「どこに行くつもりじゃ？」

「マクニ。ライの師匠のカーニヤって人に会ってくる」

「ほう。気を付けるんじゃぞ」

「うん」

「……………」

甘かった。

カーニヤの家に行くまで、こんなにも大変だとは。

頭のでっぺんから、足の先まで、どろどろになっていた。

「うわっ。なんでこんなところに、うさぎのトラップがあるのさ」
しかもなんかぶかつこうなトラップ。シャルゴは泥まみれになりながらも、クスリと笑った。

横を向きながら歩いていたので、なにか硬いものにぶつかった。

「ああ、ガケだ……」目の前にそり立つ岩の壁を見て、シャルゴはため息をついた。

4

「ふむ、ライが、なぜそんなことをすると思うのかね」

カーニャは、ゆったりとしたイスに座りながら言った。

黒いロープをはおっているせいか、シャルゴにはカーニャがとても大きく見えた。

シャルゴが、カーニャの家についてから、一言もまだ話していないのに、いきなり質問をされた。きつと、思考を読んだのだろう。

「石の玉座の辺りから、甘い匂いがしたのです。ですから……」

……

言い終わらないうちに、カーニャが口を開いた。

「わたしの魔法を見せてあげよう。おいで」そういうと、カーニャは、スツツと消えた。

「え、おいでって、どこへ行けば………」

シャルゴは、カーニャが座っていたイスに近づいた。

「あつ！」

イスの周りに、ほのかな甘い匂い。その匂いは、石の玉座の周りにあつた匂いと同じ匂いだった。

「わっ！」

シャルントが、イスを凝視していると、先ほどを同じように、スツとカーニャが現れた。

「分かったかね」

カーニャは、ニヤリと笑った。

「はい……」

シャルントは、深呼吸してから言った。

「あなたが、宝玉を盗んだのですね！返してください！」

カーニャは、あきれて言葉も出なかった。

「ええ！魔法使いは、魔法を使ったら、全員同じ匂いを発するんですか」

「そう、だから、魔法を使って消えて見せたのに。これじゃあ、口で言ったほうが早かったわい」

「ははは……。すみません」シャルントは、軽く頭を下げた。

「ということは、ライじゃなくとも、魔法が使えるつまり、マクニの人が、リンの宝玉を盗んだんですね」

「そうとは限らん」

「……どういことですか？」

「ライのやつが、あらしで全壊状態のリンを魔法で元に戻したんだろ。そのときの匂いかも知れん。余計なことをしたもんじゃ」

「ああ……なるほど。でも、家に帰ってから、何の匂いもしませんでしたけど」

「石の玉座の前では、集中していたからじゃろ」

「……そんなもんですかね」

「そんなもんじゃ」

「それじゃあ、これからどうすればいいでしょうか」

「ふむ、そうじゃのう……。」「カーニャは、しばらく目をつぶったあと、こう言った。

「リンに戻って、よく探してみたらどうかの？」そして、軽くウインク。

おばあさんが、ウインクをするなんて、なんかかっこいいな。

シャルゴは、クスリと笑った。

「それじゃあ、リンに帰ります」

「ああ、気を付けて」

家の外に出て、シャルゴは、あることを思い出した。

また、あの道を通って、帰るのか……。

シャルゴは、深く、ため息をついた。

5

やっとこさ、リンの家に帰ると、シャルゴは、倒れこんだ。

「つ、疲れた……」

「おうおう、ご苦労じゃったな。どうじゃった。ライじゃなかったらう」

「うん……」

「やはりな、そうだと思ったわい」

シャルントは、ヒヨヒヨヒヨと笑った。

「宝玉がなくなったのに、よく笑っていられるな……」

シャルゴは、祖父に微かな殺気を覚えた。

「見つかったぞ。宝玉」

「ええっ！」

シャルゴは、カバツと起き上がると、石の玉座に向かって、走り出した。

家に残されたシャルントは、「まさか、ライが、魔法でリンを戻すときに、あらしで転がった宝玉を、戻し忘れていたとはなあ。玉座にちゃんと縛り付けておいたはずなんじゃが、あらしで吹き飛ばようではだめじゃのう。まあ、近く草むらの影に止まっていたから助かったがのう」と言い、ヒヨヒヨと笑った。

「あつた」それは、石の玉座の上に、チヨコンと乗っかっていた。シャルゴは、その場にへなへなと座り込んだ。

「それじゃあ、どうして、じいちゃんの『先読み』が失敗したんだ？」

きつと、風邪でも引いていたんだらう。

シャルゴは、草むらに寝ころんだ。

『先読み』を試してみる。

近い将来、リンに別の世界から一人、人間がやってくるのが、見えた。

そのとなりには、ライがいた。

またライが、自分を振り回すのだろうか。

シャルゴは、『先読み』をやめた。

青い空に白い雲。木が青々と茂っていて、小鳥の鳴き声が聞こえる。

風が、ほほをなでた。

気持ちがいい。

それでいい。

シャルゴは、ライが来るまで、この気持ちよさを、ぞんぶんに味わうことにした。

1

今日は、まったくもって、ついていない日だ。恵美はそう断言できた。

コンビニから家に帰る途中だったのに。

なぜだか、知らないところに来てしまった。

近道しようとしたのが、行けなかったのだろうか。

ちよつと、その林を抜けて、すぐ家だったのに。

いつものように、ちよつと遠回りになるけど、道路を歩くんだった。

なに？この家は。

まったく、タイムスリップでもしちゃったのかな。

三匹のこぶたの長男が建てたような家。

おおかみが、フーって、吹いたらすぐ、飛んでいってしまいそうな家。

ワラっていうのかな。そんなので出来ている。

恵美は、恐る恐る、その家に近づいた。

話し声が聞こえる。

恵美は、耳をすました。

「こんなのも分からのか。……じゃから、『ラルシュソウ』をつんで来いと言ったんだ。これは、『ガルトンソウ』じゃろぅが。ちやんとつんで来い」年寄りの声が聞こえた。

「ええー、カーニヤ、もう夕方だよ。じきに、夜になるよ」孫だろぅか、子供の声もする。

「だからなんだ。はやくつんで来い！」

「はいはい」

こつちに近づいてくる音がする。

恵美は慌てた。

どこかに隠れなければ。だが、あたりに隠れられそうなところはない。

「あれ？ お客さん？ 見慣れない人だねえ。ささ、入って入って」
気付かれてしまった。

恵美は、自分と同じくらいの少年に進められるまま、三匹のこぶたの長男が建てたような家に入ってしまった。

2

「ふーん、そう。道に迷ったんだね」少年はライといった。

恵美は、進められるがままに、イスに座り、ここに来たいきさつを話し始めた。

「コンビニって、なに？」

「……………はい？」

ちよつと待つてよ。

恵美は信じられなかった。

わたしとだいたい同じ年ってことは十三歳くらいよね。中学一年で、コンビニを知らない人がいるとはね…………。

「まあ、何でも売っているお店屋さんかな」

「ふーん、そうなんだ」ライは神妙な顔でうなずいた。ウソをついているようではなかった。

恵美は、ライの後ろに座っている、老婆が気になって仕方がなかった。

着ているのは、確実に魔法使いの話で出てくるローブ。

鋭い目と、とがった鼻が、いかにも魔女らしい。

その魔女が、口を開いた。

「なんだい、わたしのことが気になるのかね。人間界のお譲ちゃん」

きや。

恵美は、飛び跳ねそうになった。

思考を読んだわ。それに人間界だって！ってことは、もしか、ここは魔界！？

「いいや、ここは、マクニ。魔界の連中とは違うのさ」

「で、でも、魔法使いなんでしょう？」恵美は、恐る恐る魔女に聞いた。

「いかにも。わたしは、魔法使いのカーニヤ・ストロンディアルだ。こいつは、孫ではなく、わたしの弟子だ」ライを指さして、カーニヤが言った。

「魔法使い……。本当に？ あ、あの、魔法を使って見せて」「よろしい」

カーニヤは、指をパチンと鳴らすと、スッと消えた。

「わっ……。消えた」

「どうだい」見えないのに、カーニヤの声が聞こえた。

「す、すごいです！」

また、パチンという音が聞こえて、カーニヤの姿が現れた。

「ライ、この少女に、ここの世界を案内しなさい」

「えー、どうしてさ」

ライは、ほほをふくらせた。

「この世界に、人間界からの訪問は、二十年まえにあつたきりだ。とっても珍しい者なんだぞ」

「案内したからって、なんになるのさ」

「いいから行け。マクニではなく、リンやクウクに行け」

「またこのパターンか……」

ライは、ため息をついているが、恵美は、ワクワクしていた。

魔法の世界が見られる。なんてすばらしいんだろう。

今日は、まったくもって、ついている日だ。恵美はそう断言できた。

3

リンはとってもすばらしいところだ。

恵美は、嬉しかった。

人間界から来たというだけで、長のシャルントから、手厚いお出迎えがあったからだ。

「これ、おいしいですね」恵美は、赤い木の実を、ほおばりながら言った。

「そうじゃろう、そうじゃろう。人間界には、ないのか？」

「ええ、ないです。似たようなもので、リンゴがありますけど。でも、こっちのほうが、甘い」

「ほう、リンゴとな。一度食べてみたいもんじゃわい。 シャルゴ、シャルゴ！ ライとばかり話してないで、こっちにたくさん、木の実を持ってくるのじゃ」

「はいはい」

シャルゴと呼ばれた少年は、ライと共に、たくさん木の實をテーブルに置いて、イスに腰掛けた。

「リンのみなさんも、魔法が使えるんですか？」恵美は、微笑みながら言った。

魔法の世界だから、当然だろうとは思ったのだか。

他の三人は、一瞬顔を曇らせたような気がした。

「い、いや、リンの住人は魔法を使えないんだ。ただ、『先読み』があるけどね」ライが、微笑みながら答えた。

気のせいかな、恵美にはすこし、ライが青ざめているような気がした。

「……………『先読み』ってなんですか」

少し、空気が重くなったが、気になっていることは、聞きたい恵美だった。

「ああ、未来が分かることだよ」シャルゴが答えた。

恵美は、シャルゴが思っていたよりも高い声なので、びっくりした。

「へえ、それは、すごいですねえ。あ、その『先読み』を、やつてもらえたら嬉しいなあ。わたし、いつ人間界に帰れるのかって」
恵美は、いくら、魔法の世界が好きだとしても、やはり元の世界には帰りたいと思っていた。

「ああ、いいじゃろう」シャルントは数秒の間、目を閉じていた。目を開くと、「今日中には、帰れるじゃろう」と言った。

恵美はすこしガツカリした。元の世界には、帰りたいが、一日じや短すぎる。

「ええ！今日中ですか。それじゃあ、はやくクウクに行かなきゃ。カーニヤになんて言われるか」

「オレも行く」

シャルゴが、イスから立ち上がった。

4

「クウクのみなさんは、すごいですねえ」

クウクの『飛び』を間近でみて、恵美は感激していた。

「なあ、ライ。さつきからこいつ、すごいとしか言っていないぞ」

「まあ、そういうお年頃なんでしょう」

ライとシャルゴの会話がうしろから聞こえるが、恵美は無視していた。

背中に羽が生えているなんて、妖精みたい。

しかも、羽の色が一人ひとり違っていて、きれい。これが十人十色ってやつね。

「わあ、あの人の羽、すごくきれい」恵美が指さした人は、濃い青色の羽を持つ少女だった。

「ああ、キリアさんだ」

ライが、恵美のそばに立って言った。

濃い青色の少女は、ライの声に気付いたようだ。こっちに降りてくる。

「ライ。久しぶりね」ライの前に立って、ニツコリと笑うキリア。

「その方は？」キリアは恵美に気が付いて言う。

「恵美っていう、人間界から来た奴。こっちはリンのシャルゴ」

「こんにちは」

「こんにちは。へえー。人間界からか。はじめてみた」

キリアは恵美をジロジロと見る。

恵美も負けじとキリアを見た。

羽の色と同じ、濃い青色のショートヘア。

目がパッチリとして、鼻は高くもなく低くもなく、整った顔だった。

きれいじゃなくて、かわいい感じの人だ。

恵美はそう思った。

「キリアさん、クウクを案内してやってよ」

「オツケー。まかして」キリアは、恵美にパチンとウインクした。それから、恵美は、いろいろなものを見た。

中央に立つ三本の木。

時計のように並ぶ、十二軒の家。

その家の中。

書斎。

本がすきな恵美は、その部屋に釘付けになった。

「へえ、本がそんなにすきなね」キリアが微笑みながら言う。

「はい、とつても」

「それじゃあ、次に行くところは決まりね」

「ああ、サクリか」

「そう、あたし、一度行ってみたかったのよ」

「自分が行きたいのか」ライは、軽くため息をついた。

「まあね」

「オレも、ずっと行ってみたかったな、サクリ」シャルゴが言う。

「サクリってどんなところですか？」

「行ってみれば分かるさ。って、ぼくたち、一度も行ったことないけど」

ライは、首をすくめた。

5

「着いたはいいが、どこに行く？」ライは、サクリに着くなり言
った。

「さあね」と言いながら、キヨロキヨロとあたりを見渡すキリア。
シャルゴも、無言であたりを見渡していた。

恵美も見てみる。

一瞬、人間の世界に戻ってきてしまったかと思うほど、ごく一般
の町並みが広がっていた。

木造二階建ての一軒家があれば、八百屋さんがあり、肉屋さんが
あった。

ただ一つ、違っているものといえば、サクリの中央にそびえたつ、
たてにも横にも大きい、ドーム状のレンガの建物があるくらいだ。

「とりあえず、あそこにいったらみるか」

ライが、指さしたさきには、あの大きな建物があつた。

「近くで見ると、迫力満点」キリアが恵美の頭ぐらいの高さまで
浮きながら言った。

「サクリ図書館だつて」シャルゴが看板の文字を読む。

「図書館か……、入ってみるか」

重い戸を開けると、壁一面に本がつまっていた。

ここは、本好きに取つての天国だ。と恵美は思った。

中央には、らせん階段が、六本ほど延びていて、二階へとつなが
っていた。

二階へ上ろうとすると、近くにいた人に呼び止められた。

「二階には、本はないよ」

「それじゃあ、なにがあるのさ」キリアが聞く。

「作家さんたちの創作場だ。お前さんたち、編集さんなんかか

い？」すると、キリアは、一步前に出て、微笑みながら話を始めた。
「ええ、そうです。この人。ツェンター・カロコの編集さんですわ。あの、カロコさんは、どちらにいらっしゃるのかしら」キリアに背中を押され、前に出る恵美。

「どうやら、恵美がその編集さんらしい。」

恵美は、あわてて、目の前のサクリの住人に、引きつった笑顔を向けた。

「カロコさんのかい。それは、失礼。場所は、階段の『5』って書いてある所から上ると、一番近いよ」

「言うが早いが、その人は、本棚のほうへ歩いていった。」

「はあ、びつくりした。キリアさん。何してくれるんですか」恵美は胸をなでおろした。

「あはは、ごめんごめん」キリアは頭をかきながら、笑った。

「でも、ツェンター・カロコの場所が分かってよかったじゃない」

「だれですか。その人」

「まあ、とにかくあって見ましようか。『海の中の住人たち』の作者に」

『5』と書かれた階段を上がると、壁に向かって、机がズラツと並んでいて、等間隔に、壁が立ててあった。どうやら、それぞれ個室になっっているらしい。

階段側にある廊下を歩いていくと、その個室一つひとつに、一人のサクリの住人が、頭をかきむしたり、本でなにかを調べていたり、ペンを持って書いていたりしていた。

ドアがなく、となりを仕切る壁しかないので、廊下を歩けば、すべて丸見えだった。

「マサラ・コンツエール……………サラク・ミタゴラニユ……………」

ライが、天井からくさりでぶら下がっている、板の文字を読み上げながら歩いていた。

「どうやら、作家さんの名前らしい。」

「……………ツエンター・カロコ……………ここだ！」

そこには、黒い髪が、腰の辺りまでまっすぐに伸びた女の人が座っていた。

「この人が……………」声がするほうを恵美を見ると、キリアが唾をゴクリと飲んでいた。

「ええ、わたしが書いたわ。『海の中の住人たち』を。でも、どうしてここまで来たのかしら」革張りのゆつたりとしたイスに座りながら、カロコは話した。よどみない、きれいな声だった。

「それはですね……………」ライは、恵美の知らない話を始めた。

ロゼという少女のこと。

悪夢の中のチリカのこと。

その悪夢の根源を見つげるために、いろいろなところに行っていたこと。

リンであつたこと。

クウクで『海の中の住人たち』の絵本を見たこと。

ロゼの頭の中を魔法で見たこと。

海の区域、カリトへいったこと。

ロゼが、チリカ本人だったこと。

海の中の花のこと。

それが終わってから、恵美という人間がきたこと。

カーニャに、この世界を案内しろと言われたこと。

そして、ここまで来た経緯。

「そう……………」

一通り話を聞いたあと、カロコはしばらく、宙をにらんだまま動かなかつた。

「なぜ、あなたが、カリトのことを知っていたのですか？ 創作ではない。これは事実です。そのことを、ぼくらは知りたい」

ライは、黙ったままのカロコに聞いた。

恵美も、知りたかつた。

今聞いた、冒険が本当なら、なぜこの人は知っているのだろうか、と。

「わたしは、カリトの住人でした」

カロコは静かに、語り始めた。

7

カロコは、もともとカリトに住む、リンであつた。

いつも冷静沈着。何事にも、考えて行動する性格だつた。

カロコだけではなく、リンの住人はたいてい、同じ性格をしていた。

みな、地上に出たいと言つていたときも、カロコを含む、リンたちは、地上に出たらどうなるのかを『先読み』で調べてみた。

『先読み』で見えたのは、みなが砂浜で、もがき苦しむ場面ではなく、カリトの長チリカがある呪文を唱えて、指先から花を出し、地上に出て行くところだつた。

カロコたちは、チリカのように『先読み』が達者ではなかつたので、自分の見たい未来を見ることが出来なかつたのである。

地上に出ることを反対していたチリカが地上に出た、という未来がみえたカロコたちは、安心して、他のマクニやクウクに地上に出ても安心だ。ということ伝えた。

マクニやクウクはそれを信じて、地上へ飛び出していった。

カロコと共に、『先読み』をしたリンの人たちも、地上へ行つた。カロコと数人の仲間たちは、地上にはあまり興味がなかつたため、カリトに残り、みなが帰ってきて、土産話を持つてくるのを、楽しみにしていた。

ところが、いくら待っても、誰も帰つてこなかつた。

そんなにも、地上は楽しいところなのだろうか。

カリトに帰ってきたくないぐらいに、楽しいところなのだろうか。カロコたちは、相談の末、自分たちも、地上に出てみることにした。

一体どんなところなのだろう。カロコたちは、ワクワクしていた。そのときである。

すすり泣きが聞こえた。

カロコたちは、泣き声のするほうへ行ってみた。

岩かげから、そっとのぞいてみる。

すると、チリカが、長く美しい髪を振り乱して、泣いていた。

どうして泣いているのだろう。

カロコたちが、顔を見合わせたそのとき。

チリカがある呪文を唱えて、指先から花を出し、地上へ行ってしまった。

そう、『先読み』で見た、あの光景と同じだった。

残されたカロコたちは、急いで、チリカと同じことをして、地上へ上がった。

そこで見た光景は、おぞましいものだった。

たくさんのカリトたちが、浜辺で息絶えていたのである。

カロコはふしぎに思った。

どうして自分たちは、平気なのか。

そして、チリカはどこへ行ってしまったのか。

よく考えてみると、自分たち以外のカリトは、花を出していなかった！

そうか……………それで。

カロコたちは、いたたまれない罪悪感にみまわれた。

どうして、チリカが花を出したことを、ふしぎに思わなかったのだろう。

どうして、他の住人にそのことを言わなかったのだろう。

自分たちだけが、助かって、良かったのだろうか……。

やっと、チリカが海の中にいたときに、泣いていた理由が分かった。

そして、なかなかカリトが、帰ってこなかった理由も。

カロコたちは、浜辺で、大量の涙を流した。

ごめんなさいと何度もつぶやきながら。

物音がして、カロコは顔を上げた。

そこには、チリカがいた。

フラフラとして、今にもたおれそうだった。

「チリカ……！」カロコは、チリカの元へ走った。

地上では、思うように体が動かなかったが、なんとかチリカの所へ着いた。

「あなた……、どちら様ですか？わたしは、チリカではありません。ん。ロゼです」

チリカは記憶をなくしていた。

呆然としているカロコを無視して、チリカはマクニのほうへと去っていった。

カロコは、浜辺に戻ると、チリカが記憶をなくしていることを話した。

だが、自分たちでは、どうすることもできない。

海という、住みやすい環境に戻るか。

カロコたちは話し合った。

結果はすぐに出た。

そんなことは、してはいけない。

それに、海に戻ったからといって、一体何があるのだろう。

何もないじゃないか。

一番住みやすいが、一番住みにくい場所だ。

カロコたちは、浜辺で別れた。

十数人。一塊になっても、なにもできやしない。

だいいち、カリトがこんなことになったのは、自分たちのせいだ。

固まって、生きている資格なんてない。

カロコは、クタクタになるまで歩いた。

歩いて、着いた場所は、サクリだった。

サクリの親切な住人に助けられ。

カロコは、今こうして、サクリの住人になった。

8

「絵本を書いたのは、チリカが読んで、記憶を取り戻してくれたら、と思っただけ」

「どうして、最後のほうを、チリカが神になったと、書いたのですか？」ライが聞く。

「チリカが、記憶をなくしたということが、信じられなかったから。微かな抵抗だと思っただけ」

「なぜ、チリカの記憶がなくなったとお考えですか」

「恐らくは、チリカが、自分で記憶と人格を、花に吸い取らせたんだと思うわ。無意識のうちにね。とても、責任を感じていたんだと思うわ」

「あたし、見たよ。カロコさんたちの花。とってもきれいだった……」キリアは、その光景を思い出したのか、目を細めていた。

わたしも、見てみたいな。

恵美はそう思った。

「カロコさんの生き残った仲間たちは今、どうしているんですか？」

ライが、また質問をする。まったく、疑問がたえない人だ。

「さあ、分からないわ。みんな元気で生きているといいけど」

「そうですね……。ああ、お忙しいのにお手数をおかけしました。それでは、もう、帰らせていただきます。ありがとうございました」

「いいえ、こちらこそ、ありがとう。チリカの記憶が戻ったと分かって、すっきりしたわ」

恵美は、カロコの個室から出る前に気になることを聞いた。

「もう、海へは、戻らないのですか」

「ええ、もう、二度とないわ………」

カロコは、いったん押し黙ると、言った。

「でも、たまに戻るのも、いいかもしれないわね」

「はい、戻られたほうがいいと思います。罪滅ぼしだって、ちゃんとしていると思いますし……それに………」

「それに？」

「だって、あなたは、カリトの住人なんですから」

カロコは微笑んだ。今までの中で最高の笑顔で。

「あそこの林に向かって、一気に走って」
みんなから一足遅れて図書館から出ると、シャルゴが百メートルぐらい先の林を指さして言った。

「え？ どうして」

「さつき、シャルゴに『先読み』をしてもらったんだ。したら、あの林に向かって走ったら、人間界に戻るってさ」

「早くしないと、戻れなくなよ！」シャルゴがせきたてる。

「バイバイ。楽しかったよ」キリアは微笑んで手を振った。

「えっ、でも」

「早く！」

恵美は走り出した。

でも、ひとつ、気になることがある。

「ねえ、どうして………シャルゴが見た未来では、わたしは林に向かって走ることになったの？」

恵美は、走りながら叫んだので、息が切れそうになった。

「それはねー」後ろからライの叫んでいる声が聞こえた。

「シャルゴが『先読み』をしたからだよー！」

「えー！ そんな、堂々巡りなのー？」

「そうだよ。でも」

林に入った。

「でも」のあとは、なんだったのだろう。

恵美は、考えているうちに、元の世界へ帰ってきていた。
たまに通る、見慣れた林。

恵美は、足を止めて振り返った。

そこには、さつき行ったコンビニの照明が光っていた。

「戻ってきたんだ」

腕時計を見ると、夕方の六時になっていた。

「二時間しかたってない……………」

こっちだと、時の流れが遅いのだろうか。

何だったんだろう。と恵美は思う。

二時間なんて、とっても短くて、忙しい旅行だったな。

でも、よかった。楽しかった。

10

今日は、まったくもって、ついている日だ。恵美はそう断言できた。

3：09&3：10（後書き）

お久しぶりです。

この作品は、某出版社の新人賞に応募して、見事に落ちてしまった作品です。

読んでみてぜひ感想、評価をお待ちしています。

今後の創作に役立てたいと思いますので、ぜひお願いいたします。

それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6527c/>

透明な階段

2010年10月11日03時36分発行